

国指定史跡

上神主・茂原官衙遺跡の時代

上神主・茂原官衙遺跡の

時代の栃木

先月は、上神主・茂原官衙遺跡の時代の日本がどのような時代であったかを概観しましたが、今月は、この時代の栃木の状況を紹介します。

当時の行政区画は、五畿七道（畿内・東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道）の下に、都道府県にあたる行政区分である「国（くに）」が置かれ、さらにその下に郡が置かれました。当時の栃木県は東山道に属し、「下野国（しもつけのくに）」と呼ばれ、現在の栃木市田村町周辺に国府が置かれ、下野国内には足利・梁田・安蘇・都賀・寒川・河内・芳賀・塩屋・那須の9郡が置かれました。

当時の栃木県、特に河内郡を語る上で忘れてはならない人物がいます。下毛野古麻呂です。古麻呂は名前のとおり、下野出身でありながら都で活躍した豪族です。705年に兵部省長官、707年に文武天皇の山陵司（お墓作りの責任者）、708年に式部省長官、同年に正四位下に叙せられ、709年に亡くなりました。この他にも、律令国家の基本法である「大宝律令」の編纂に当たったことは特筆されます。このメンバーは、藤原不比等などの有力貴族、学者、留学生など19人で構成されていました。この古麻

呂の活躍にあわせるように、690年には新羅（当時の朝鮮半島の国）人が下野に移住したり、死後ではありますが、760年に下野薬師寺に戒壇院が設置されるなど、政治・文化の面で下野に様々な影響を与えました。

もう一つ忘れてはならないのは、蝦夷平定の前線であったことです。書物などに見られる事件として、715年に下野国など6か国から富民1000戸が陸奥に移され、720年の蝦夷の反乱では下毛野石代が征夷副將軍として派遣され、775年から776年には下野から出羽（現在の秋田・山形県）に出兵、796年には、下野国などの約9,000人が陸奥国伊治城（現：宮城県栗原市）に移住、798年には逆に下野国などに移住した蝦夷を厚遇するようにと命令が出されています。

このように当時の栃木は、古麻呂の活躍、蝦夷平定の最前線として機能することにより、多くの人・物が盛んに流通していた時代であると考えられます。その一方で、蝦夷平定などの国家事業によって、下野国内が徐々に疲弊していったことも事実なのです。



復元された下野国府国庁の前殿

たね川柳

岡島秀宝 選

人の世の不幸予期せぬものばかり

大町 大八木トク

カニ雑炊困む家族の恵比寿顔

上蒲生 渡辺 文子

長湯して心配される歳になる

石田 大島笑太郎

いざなぎの景気を探す虫めがね

上蒲生 菅沼 マサ

朝帰り訛など言わずそつと寝る

石田 柳田 政孝

おだてればすぐに舞い上がるじいの風

上蒲生 菅原 妙子

読みかけのページをめくる昼の雨

石田 柳田キミ子

かすむ目も好きな読書へ生き返る

石田 大塚 ナカ

大金が転がりこんだ幸不幸

上蒲生 柳田 智江

電話口姑に似て来た嫁の声

石田 稲見 チイ